



# 宮入慶之助記念館だより

特定非営利活動法人宮入慶之助記念館  
2013(平成25)年 11月30日発行

第19号

## 巻頭言 顧みられない熱帯病 名誉館長 多田 功

今秋11月に、宮入慶之助記念館はミヤイリガイ発見100年記念展を九州大学医学図書館で開催しています。宮入教授が助手の鈴木先生とともに福岡・佐賀の住血吸虫病流行地で、この寄生虫感染にかかわる中間宿主カイを発見し、動物実験で確かめた論文を発表されて今年が100年目です。当時全ての吸虫感染にカイが関わっていることが既に知られていましたが、住血吸虫だけはどうしても見つからなかったのです。その後の経緯は記念館だより17号に記しましたが、この研究はそれほど画期的なものでした。

世界保健機関は「顧みられない熱帯病」という名称で17の疾病を防圧の対象としています。そのうち11が寄生虫による疾病で、寄生虫がいかに人類の健康をむしばみ、防圧しにくい対象であるかが分かります。住血吸虫病は現在アフリカを中心に2億人の患者がいる疾病です。特効薬があるにもかかわらず、その防圧は進んでいません。沼や湖などの水系に生息するカイが産出する無数の感染幼虫(セルカリア)が人の皮膚から侵入する感染パターンを断ち切れないので、そこには人の習慣、風習、無知、ダムの建設、季節的な増水などが関わって、防圧を妨げています。

何故疾病を「顧みられない」という形容詞で強調しているのでしょうか?それはこの17の疾病から容易に想像出来ますが、いずれも貧しい国々に流行しているために製薬会社は薬剤を積極的に開発しながら、その防圧費用も政府とか国際協力などで賄うしかないので、最近日本で、ある国際的な降圧剤の臨床試験のため、製薬会社がいくつかの大学病院に潤沢な研究補助金を出し、データ操作ま

でしていた問題が暴露されました。しかし貧しい人々の必要とする熱帯病治療の薬剤開発ではこのようなことは起こりません。

世界保健機関はOECD加盟国、国際的な製薬会社、大企業の援助基金などの拠金で「顧みられない熱帯病」対策を進めています。然し疾病ごとに防圧の難易度は違います。日本では住血吸虫病対策が成功しましたが、アフリカなどに流行する他種の住血吸虫病ではカイが異なり、生態系、天候、地勢、人の習俗も違います。従って住血吸虫病対策には地道な基礎研究が必要なのです。

8月に韓国で学会に出て、多くの寄生虫学者達と旧交を温めました。現在、彼らの多くがアフリカや東南アジアの寄生虫防圧活動に参加していました。遠い国の疾病だからと言ってこれらの対策を日本人が顧みないことは許されないとします。

## 理事就任にあたって 理事 太田伸生

本年6月の総会において、宮入慶之助記念館の理事に推挙いただきました。世界の誇るべき功績を残された宮入慶之助博士を顕彰する本会に、微力ですが尽力させていただく機会をいただきましたことは、大きな喜びであります。会員の皆様には宜しくお願い申し上げます。

私の自己紹介を兼ねて、ミヤイリガイとの縁について述べてみたいと思います。私は幼少期を福岡県久留米市で送りました。当時の久留米市は日本住血吸虫症の流行地であり、筑後川を隔てた佐賀県鳥栖市で宮入先生は中間宿主貝を発見されました。筑後川河川敷一帯はミヤイリガイの繁殖地であり、住血吸虫症の恐怖は子供心にも焼き付いていました。



長じて進学した信州大学医学部では、授業の一環として甲府までクラス全員でミヤイリガイ採集に行きましたが、同輩の多くは車中の宴会が目的でした。信州大を卒業した1977年は日本で最後のヒト感染が確認された年ですが、その年に東京医科歯科大学大学院に進学しました。遺伝学の研究室でしたが、与えられた研究テーマは「住血吸虫症の患者さんのうち、肝硬変になる人とそうでない人の体質の違いを解析する」というもので、住血吸虫との縁は切れませんでした。毎月山梨に赴いて患者さんから採血し、東京に戻って徹夜で実験する生活でした。私の医学博士号は患者さんのご厚意に支えられたものでした。そして今日に至るまで、日本住血吸虫症が私の研究課題であり、今でも年に3回は甲府盆地にミヤイリガイの採集に出かけます。

さて、本会にあって私に何が出来るかを考えてみました。私は学界の人間として、宮入先生のご功績を医学関係者の間で長く伝える努力を続けるのは当然の使命です。しかし、大学が「白い巨塔」と言われた頃ならいざ知らず、大学で行われる研究は一般市民と共有することが求められる時代です。宮入源太郎理事長は宮入先生の功績を一般市民へ広く紹介する活動を精力的に展開されていますが、私も科学的なアドバイスを通じて理事長を補佐させていただきたいと思えます。さらに、今年3月の第81回日本寄生虫学会の際に「ミヤイリガイ発見100周年記念事業」として市民の皆様を紹介する機会を本会とともに行うなど、私を取りうる立場から積極的な発信を行いたいと思えます。

宮入先生が日本住血吸虫の中間宿主を発見されたことは公衆衛生学的大発見であり、ノーベル賞候補にも挙げられたことは当然のことでした。宮入先生の功績は、きちんと後世に伝える必要があります。さらに海外の市民、研究者にも積極的に紹介をしていくことも大切です。今年3月に、高名な研究者でアフリカの住血吸虫中間宿主貝を研究している米国のMatty Knight博士を案内して山梨のミヤイリガイ生息地を廻りました。彼女も宮入先生の中間宿主貝発見に始まる公衆衛生活動

をよく知っておられ、また本会の活動にも非常な敬意を示されました。本会の理念に沿って、宮入慶之助博士の功績を世界に伝えるべく、今後一層の努力をして参りますので宜しくお願いいたします。

(東京医科歯科大学・教授、日本寄生虫学会・理事長)

## 国立科学博物館の

### 企画展示を担当して

国立科学博物館動物研究部長 倉持利明

宮入慶之助博士によるミヤイリガイの発見から100年を機に、日本住血吸虫症撲滅への道のりをたどり、宮入博士をはじめ本症の撲滅に尽力した人々の功績を顕彰し、さらに現在の日本における公衆衛生の実態を紹介する企画展を開催しました。約1ヶ月間（平成25年5月15日～6月16日）という短い期間、しかも限られたスペースでの展示でしたが、宮入慶之助記念館と目黒寄生虫館に共催をお願いし、関係各機関多数のご協力を得て、3万人以上の方々にご覧いただくことができました。宮入慶之助、ミヤイリガイ、日本住血吸虫といったキーワードの知名度は、いずれも決して高くはありません。そこで「日本はこうして日本住血吸虫症を克服したーミヤイリガイの発見から100年」といった、やや挑戦的なタイトルをつけて来館者の注目を集める工夫をしました。

はじめに、謎の奇病として恐れられた本症やその流行地を多くの写真で示し、日本住血吸虫の発見、ミヤイリガイの発見と日本住血吸虫の生活史の解明までを紹介しました。ついで、本症撲滅への道のりを各地の取り組みを示す書物や写真、さらには殺貝剤散布に用いた道具類を展示し、山梨県地方病撲滅協会制作の映画「地方病との闘い」も上映しました。宮入博士その人を紹介するコーナーを設け、帝国大学医科大学の卒業証書をはじめ、写真、著書等を展示しました。さらに、宮入博士のお孫さんで天文学者の村山定男博士（当館元理工学研究部長）に取材をお願いし、おじいさんの思い出を語っていただきました（とこ



ろが残念なことに、村山博士は8月13日に逝去されました。住血吸虫症の現在にも目を向けました。世界の住血吸虫症を分布図で示し、現在も続けられている住血吸虫の研究や世界保健機構（WHO）による掃討作戦を紹介しました。そして最後に、死亡数・死亡率、原因別死亡数、感染症の報告数、食中毒の発生件数などの推移を示し、日本における公衆衛生の現在を考えました。

今回の企画展で特に印象に残ったのは、来館者の方々が非常に熱心に展示物や映像、解説パネルを食い入るようにご覧になる姿でした。それは、謎の奇病の原因究明から撲滅に至る歴史が、来館者の方々にドラマチックに伝わったためと考えられ、標本、写真、文献等の資料の力によるものでしょう。資料を自分の足で見てまわり、同時に宮入博士や日本住血吸虫にゆかりの地を訪ね歩いたことも、若干ではあれ資料に力を与えたものと信じたいところです。資料は時を経るに従い失われがちですが、それを極力食い止めながら収集すること、少なくとも保管されている場所を把握することが重要です。私は、宮入慶之助記念館の地道な活動はより広く知られるべきであり、より高く評価されるべきものと考えておりますが、この展示を通してそれらが少なからず叶えられたものと確信しています。

### 愛弟子とのツーショット —その3—（最終回） 研究員 宮入建三

前号に引き続き、高橋操三郎著「私の九大時代の諸教授に思う」17.宮入慶之助教授の部をご紹介します。（以下、原文のまま）

先生は又、能書家であった。

あるとき、教授室で、佐久間象山筆の掛軸を見たことがある。その際、その掛軸を前に先生は言われる。「僕は生来、字が下手で、学生時代にはノートがとれないで困った。僕と同藩一信州松代藩一の先輩佐久間象山について親しくその霊筆を学んだ松木さんから、昔、字の手本を書いてもらった。今、それをもとに、毎朝一時間位、字の練習をやっている。君も

どうか」と。

それ以来私は、先生から短冊や色紙に揮毫してもらおうようになり、その揮毫は、私にあてられた先生の書翰二百余通と共に、愛蔵して皆ここにある。

先生は、書に於ては、言わば象山書道の孫であり、その麗筆は、象山の麗筆と鑑別しがたい。

象山の省侃録より、私のため特に撰ばれ、書き下された和歌一首を、ここに掲げて、思慕の念を新にしよう。

和歌を音読すれば

ころみにいぎやよばわんやまびこの  
こたえだにせばこえはおしまじ  
一報いられさえすれば努力は

惜しまないとの意一

先生は、更に和歌も俳句もよく詠まれた。随時、私に詠み下された和歌二十余首の中、私の好める一首を、ここに紹介しよう。

信濃路の浅茅が原のみやま草

植え代へがたし里の庭には

「人の一生は性格と環境に定まる」との意で、この作は、先生が、昭和十二年郷里の信濃路より持ち帰られたみやま草を、自宅の庭に植え代えたが、つかないのに思を寄せて詠まれたもの。

大正十五年初夏新緑の候である。私は、先生にお供して、恙虫病の研究に、一ヶ月余り、私の郷里に近い流行地一越後浦佐一に出張、毎日魚野川畔に出かけ、恙虫をと、二人で川原の砂を掘りさがした。ある日、先生宿で、しばしうたたね、さめて後詠まれる。

一、うたたねの夢は川原の砂を掘る

二、魚野川きよき流れの溶々と

鮎も肥えたり鮒も上り来

魚野川畔の一带は、山水麗しき我が懐しの自然郷。人生の天日傾いて日暮れなんとする今日、私は、この句歌に、懐旧懐郷の情、一段と深きを覚える。

先生の面影や筆才に見入りつつ、稿を草し終われば、在りしみ姿の眼前に散らつき、情に堪えないものがある。一長野県・明治二十三年東大卒・昭和二十一年逝去一



## 訃報

宮入慶之助の長女加久の長男である村山定男氏が8月13日に89歳で亡くなりました。

子供時代から星好きで、東京大学理学部を卒業、東京・上野の国立科学博物館に勤め、天文学者として活躍され多くの天文ファンに慕われました。中学生のころ、当時東京・練馬に住んでいた伯父を訪ねての思い出を著書に記述されています。記念館にも温かいご支援を賜りました。

4月に国立科学博物館の倉持利明氏とともに5月からのミヤイリガイ発見100年記念の企画展示のためにインタビューしたのが最後となりました。生前の宮入慶之助を知る人がまた一人他界されました。ご冥福をお祈りいたします。

## 記念館活動記録

□5月15日より6月16日まで国立科学博物館（東京都台東区上野）でミヤイリガイ発見100年記念企画展示「日本はこうして日本住血吸虫症を克服した」が目黒寄生虫館と宮入慶之助記念館の共催で開催されました。当記念館から写真、書籍、展示品の一部などを貸出して企画に協力しました。博物館側の集計によると会期間中の来場者は約33,000人とのことでした。我が国の理系博物館の頂点にある国立科学博物館が企画展示として取りあげて下さり、多くの来場者に住血吸虫症撲滅の歴史を知っていただいた



ことは誠にうれしいことです。

□6月6日、ホテルJALシティ長野会議室にて平成25年度の通常総会が開催され、平成24年度の事業報告、同収支決算、25年度の事業計画、同役員が承認・可決されました。役員は、石井 明理事が退任、太田伸生氏が新任理事に就任されました。

□6月25日より8月12日までJA長野厚生連篠ノ井総合病院（長野市篠ノ井会）の院内ギャラリーで「ミヤイリガイ発見100年記念展」として当記念館のパネル20枚によるパネル展示を開催させていただきました。郷土出身の衛生学者の功績を病院の職員の方々と患者さんにご紹介できたことは、ありがたいことです。



□7月20日より9月23日まで長野市立博物館（長野市小島田町）にて夏季企画展「寄生虫一体にひそむ不思議な虫たち」が開催されました。当記念館からパネル、写真、書籍、展示品の一部を貸し出すとともにギャラリートークや長野市立博物館友の会主催のミュージアムショップの開催に協力しました。ギャラリートークは、8月17日に九州大学大学院保健学部門講師の小島夫美子氏（記念館会員）により「ふしぎな寄生虫のはなし」と題して実施されました。また、期間中の5回を選んで20分程度のミニ・ギャ

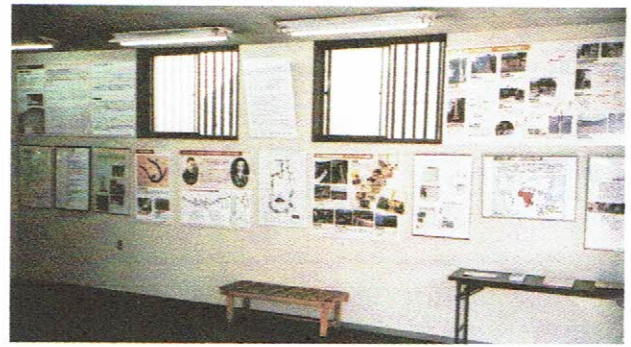


ラリートークを記念館館長が実施しました。ミュージアムショップでは、ミヤイリガイ発見100年記念グッズとして記念デザインによるTシャツとカイ標本を封入したストラップを出品し、当記念館の周辺に在住する会員6名が当番制でショップの販売に協力しました。寄生虫とそれに関連した郷土出身の衛生学者宮入慶之助の紹介を企画展示として取り上げていただき多くの市民にこのことを知っていただけたと思います。



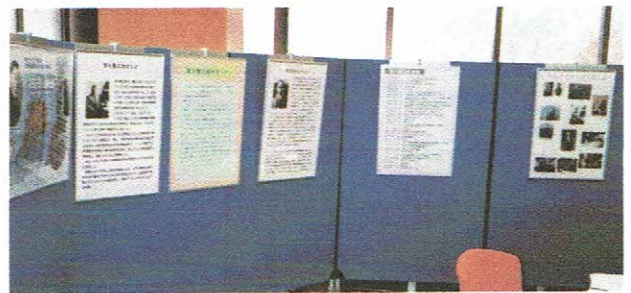
□8月より12月末の予定で目黒寄生虫館が「ミヤイリガイ発見から百年」と題する特別展示を館内にて実施されました。日本住血吸虫症の終息までの要点を分かり易くまとめておられます。当館も企画段階で協力させていただきました。

□10月1日より11月5日まで松代まち歩きセンター伝承館（長野市松代町）にてNPO法人夢空間松代のまちと心を育てる会と当記念館によるパネル展示「宮入慶之助の業績をたたえるパネル展」が実施されました。大型パネル2枚を含む14枚のパネルの展示、記念館の紹介資料の配布と松代まち歩きセンター売店へ記念グッズを出品、10月6日に記念館館長によるギャラリートークなどを行いました。宮入慶之助の出身地で、彼の発見100周年をアピールすることができました。



□10月6日に開催された記念館所在地区にある岡神明社の秋の祭礼で、当館前を行進する子供神輿の参加者と祭礼関係者に「宮入貝発見百年記念」の刻印入り記念ボールペンを進呈しました。

□11月1日より12月1日までの予定で九州大学医学図書館（福岡市東区馬出）にて「日本住血吸虫中間宿主発見百周年展」が開会しました。医学図書館所蔵の書籍、資料、写真の展示と記録映画の放映、医学研究所蔵の標本展示に加えて、当記念館よりパネル24枚を展示し、大学構内の生活協同組合にて記念グッズと記念誌「住血吸虫症と宮入慶之助」の販売が行われました。また、アンケートに回答をいただいた入場者に記念ボールペンを進呈しました。宮入慶之助の研究の舞台であった九州大学医学部キャンパスで発見100周年を締めくくる行事が開催されたことは誠に意義深く、当記念館にとって光栄なことと感謝しております。



□11月14日に、当記念館にて山梨放送ラジオ制作部によるカイ発見100年の節目を機会に企画された地方病に関する特別ラジオ番組を制作するための取材が行われました。12月22日午後1時よりの放送予定とのことです。



## 会員入会へのお礼

(順不同、敬称略)

糸永 早織、 小山 信

## 賛助会員入会へのお礼

(順不同、敬称略)

林 正高、 田中 貴、 小野 涉

## ご支援へのお礼

(順不同、敬称略)

次の方々からご支援をいただきました。厚くお礼申し上げます。

### カイ発見100年記念

日本寄生虫学会、国立科学博物館、JA長野厚生連篠ノ井総合病院、長野市立博物館  
長野市立博物館友の会、目黒寄生虫館、夢空間松代のまちと心を育てる会

九州大学医学図書館

妹尾 行恭、 武井 武彦、 下平 浩、 牧 長夫、 林 英生、 金政 康弘、

内藤 淳子、 鈴木 新

### 寄 金

桜岡 澄子、 橘田 活子

### 寄 贈

福山市医師会、 天野 典英

## 編 集 後 記

- 6月の総会で石井 明氏が理事を退任、太田伸生氏が新任理事として承認されました。今号では、太田氏にご挨拶いただきました。
- 国立科学博物館の倉持氏とは平成22年2月に初めてお目にかかり、それ以来今年の記念企画展にいたるまで大変お世話になりました。その行動力と展示への手際の良さに感服しました。企画展を通じての当館に対する感想をご執筆いただきました。
- 予定より2カ月遅れて19号を発行することになりました。記念展示の写真が多いことから、カラー印刷としました。
- 100周年を機会に宮入慶之助と日本住血吸虫症の制圧までの歴史をできる限り多くの方々に知っていただくためのイベントを現状の当館の全力を尽くして実現したいと向こう見ずな計画を作成しました。自らの非力と加齢による故障に悩まされましたが、

なんとか実現できました。それぞれの企画を取り上げてくださった関係機関、資料を提供いただいた方々、記念行事に協力いただいた方々、記念行事に参加くださった方々、記念行事の企画から準備、運営から終了に至るまでご協力くださった当会員の皆様、それぞれの多大なご支援・ご協力に厚くお礼申し上げます。

### 宮入慶之助記念館だより 第19号

発行者 特定非営利活動法人宮入慶之助記念館

編集者 宮入源太郎

〒388-8018 長野市篠ノ井西寺尾2322

Tel&Fax (事務局) 026 (293) 3828

(記念館) 026 (293) 4028

ホームページアドレス

<http://www5.ocn.ne.jp/~miyai/ri/>

発行日 2013 (平成25) 年11月30日